

## ほん 本郷 遺跡

1. 所在地 高松市西山崎町987-1
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成17年4月1日  
～8月31日
4. 調査面積 3,857m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 香川県埋蔵文化財センター  
森下英治・佐々木和裕  
宮武直人
6. 調査原因 県道円座香南線改築
7. 調査結果の概要

本郷遺跡は高松平野西部、堂山丘陵裾の平野に立地する。今年度調査は昨年度調査地に隣接する南地区と、平成14年度調査地に隣接する北地区の2カ所で実施した。このうち北地区では弥生時代の大規模な灌漑水路跡や堅穴住居跡・掘立柱建物跡などを検出した。

北地区的灌漑水路跡は幅4.5～6m、深さ約1mの規模で延長約50mを検出した。出土土器から判断して、弥生時代後期初頭頃に掘削され、7世紀ごろに再掘削、8世紀初頭ごろに最終埋没したものと推定される。溝底付近には流水を示す砂層が広範囲に堆積し「組合せ式木鉄」が出土した。また、溝の肩部にはまとまって崩落したとみられる基盤層ブロック土が堆積することから、溝の掘削土を土堤状に盛り上げていたものと推定できる。この用水路に沿って、堅穴住居跡3棟、高床倉庫と推定される掘立柱建物跡4棟を確認した。いずれも弥生時代終末期ごろに所属する。堅穴住居跡は用水路の幅が狭くなり、小規模な溝が分岐する地点に位置する。堅穴住居跡床面では多量の土器片や、大形の管状土錐3点が出土した。南地区では縄文時代の河川跡がみつかり、堆積層より石器片が多数出土した。

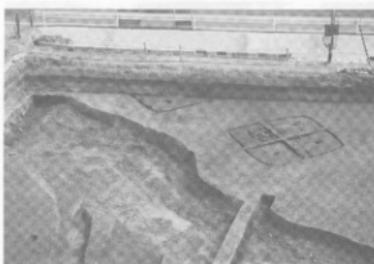
以上の調査成果は、7月9日の現地説明会で一般公開した。

### 8.まとめ

北地区では住居と倉庫で構成する弥生時代終末期の小規模な集落単位を確認した。約700m北方の中間西井坪遺跡でも、同様の集落構成が知られる。堂山北東裾の複数の微高地に小規模な単位の集落が点在する可能性が高い。(森下)



第84図 遺跡の位置(「白峰寺」)



第85図 弥生時代の堅穴住居跡と用水路跡



第86図 用水路跡出土の組合せ式木鉄

# かわ 川 原 遺 跡

1. 所 在 地 高松市中間町
2. 調 査 主 体 香川県教育委員会
3. 調 査 期 間 平成17年12月1日  
～平成18年3月31日
4. 調 査 面 積 2,700m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 香川県埋蔵文化財センター  
森下英治・佐々木和裕  
宮武直人
6. 調 査 原 因 県道円座香南線改築
7. 調査結果の概要

川原遺跡は高松平野西部、本津川支流の古川西岸に立地する。調査地の標高は約30mで、周辺は条里型地割を良く残す水田が広がる。今年度調査地は歴史地理学の研究成果による古代南海道推定地に比定される余剰帶が認められる範囲にあたる。

当遺跡は平成14年度の発掘調査により南海道側溝と考えられる遺構が見つかっていた。

今回工事範囲の中央部分を広く調査した結果、条里地割に合致する古代の直線溝（SD12）が見つかったが、前回の調査で北側側溝とされた溝は条里地割と異なる方向に流れることが判明した。したがって、古代南海道を考古学的に証明する材料は現段階では認められないことがわかった。ただし、直線溝は2回以上の掘り直しを伴い、溝幅が1m以上と規模が大きく、8世紀ごろから12世紀末ごろまで継続して使用されたこと、また直線溝より北側は13世紀以後の流路により古代の遺構面が削られていることなどから、調査地が古代南海道ではないという証拠もない。

なお、2月18日には現地説明会を開催して、発掘現場および調査図面等の一部を一般公開した。参加者約60名が熱心に見学され、古代景観としての条里地割や南海道への関心の高さが示された。

## 8. まとめ

現段階では、古代南海道に関する考古学的な材料が乏しく、今後は採取試料の花粉分析や植物遺体の同定、もしくは周辺調査とのデータ照合等によって判断材料を増やすことが必要である。（森下）



第87図 遺跡の位置（「白峰寺」）



第88図 直線溝 SD12周辺の空中写真



第89図 直線溝 SD12から六ツ目山を望む

# かわしまほんまち 川島本町遺跡

1. 所在地 香川県高松市川島本町
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成17年7月1日  
～9月30日
4. 調査面積 1,275m<sup>2</sup>
5. 調査担当 香川県埋蔵文化財センター  
西村尋文、古野徳久  
中里伸明
6. 調査原因 県道西植田高松線道路改良事業
7. 調査の概要

川島本町遺跡は春日川の西岸の扇状地に所在する遺跡である。今回の調査は県道のバイパス工事に伴う調査である。調査区は、南北でⅠ・Ⅱ区に区分し、調査を実施した。遺跡は春日川の旧支流の堆積が縄文時代後期頃には終了し、その上面に遺構面が広がる。検出した遺構は、縄文時代後期の不整形な落ち込み状遺構、縄文時代後期の遺物包含層、弥生時代後期～古墳時代前期の柱穴・井戸跡・溝跡、古墳時代後期末～古代前半の溝跡、中・近世の溝跡等のかなり時期幅をもつ。

## 8.まとめ

今回の調査で検出した遺構中には、住居等の遺構がみられない事より、集落の外縁地の様相を呈しているものと考えられる。集落の中心は、遺構の広がり及び周辺の地形等より、調査地の東側の微高地に広がる可能性が高い。

注目すべきものとしては、不整形な落ち込み状遺構であるSX202から出土している縄文時代後期の出土遺物がある。この遺構からは、接合資料を含む一括性の高い石器類が多量に出土している。特に楔形石器と石鉈の占める比率は高く、当時の剥片生産技術を検討する上で好資料といえる。(西村)



第90図 遺跡の位置(「高松南部」)



第91図 I区全景(南から)



第92図 SX202石器類出土状況

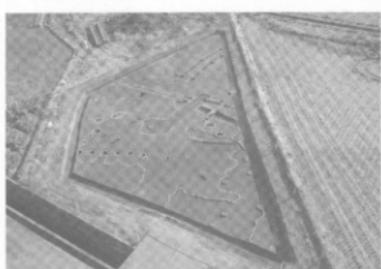
かわしまほんまちみなみ  
川島本町南遺跡

1. 所在地 香川県高松市池田町
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成17年10月1日～31日
4. 調査面積 448m<sup>2</sup>
5. 調査担当 香川県埋蔵文化財センター  
西村尋文・古野徳久  
中里伸明
6. 調査原因 県道西植田高松線道路改良事業
7. 調査の概要

川島本町南遺跡は川島本町遺跡から南へ約400m離れた、高松市池田町に所在する遺跡である。調査は川島本町遺跡同様、県道のバイパス工事に伴う調査である。

遺跡は川島本町遺跡同様、春日川の旧支流の堆積が縄文後期頃には終了し、その上面に広がっている。検出した遺構は、柱穴・溝跡等を少數検出している。出土遺物としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等が少量出土した。また、メノウ製の勾玉1点が溝跡から出土している。これらの出土遺物は、遺構面より上位の包含層中から出土したものが主であり、遺構からの出土遺物は極微量である。そのため、詳細な遺構の時期を推定するには無理があり、今後の課題になる点が多いが、埋土の状況及び溝の方向等で弥生後期、古代以降、近世以降等の諸時期に区分できる可能性がある。

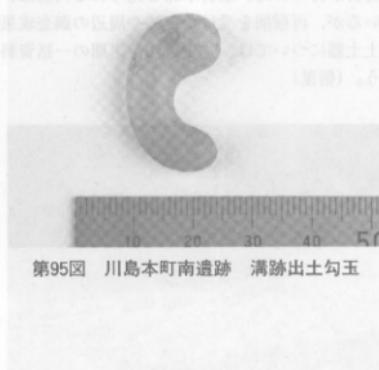
(西村)



第94図 川島本町南遺跡全景（北から）



第93図 遺跡の位置（「高松南部」）



第95図 川島本町南遺跡 溝跡出土勾玉

おおたしもすがわ  
太田下・須川遺跡

1. 所在地 高松市太田下町
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成17年5月26日  
～11月15日
4. 調査担当 香川県教育委員会  
信里芳紀
5. 調査面積 約600m<sup>2</sup>
6. 調査原因 高松琴平電鉄琴平線連続立体交差事業

7. 調査結果の概要

断続的な立会調査となつたが、弥生時代の集落に関係する遺構を確認した。主な遺構として、堅穴住居1棟・大溝1条・小溝4条・土坑2基があり、すべて弥生後期前半に属する。

大溝は、上面幅2.5m、深さ0.75mの規模を測り、断面は逆台形を呈する。最下位と中位にラミナが認められる細砂層が存在していることから、流水と滯水を繰り返しながら、埋没したものとの見られる。規模や埋没状況から見て、大規模な灌漑用水路と考えられる。埋没土中位より、弥生時代後期初頭の土器片がビニール1袋程度出土した。

土坑1は、西部が調査区外となるものの、上面幅0.7m、残存深度0.3mを測り平面形が楕円形を呈するもの見られる。埋没土中位より、完形の状態を保った弥生時代後期前葉の土器がコンテナ1箱程度、一括して出土している。すべての土器胎土中には角閃石が多く含まれる。

8. まとめ

高松東道路建設に伴う発掘調査区で確認された弥生時代後期前半期の集落の北限を推定する材料が得られた。基幹水路と見られる大溝は、出土遺物から弥生後期前半には確實に存在しているが、再掘削を受けた痕跡や周辺の調査成果から弥生前期末葉に遡る可能性が高い。土坑出土土器については、弥生後期前半期の一括資料であり、土器編年上の重要な位置を占めるだろう。(信里)



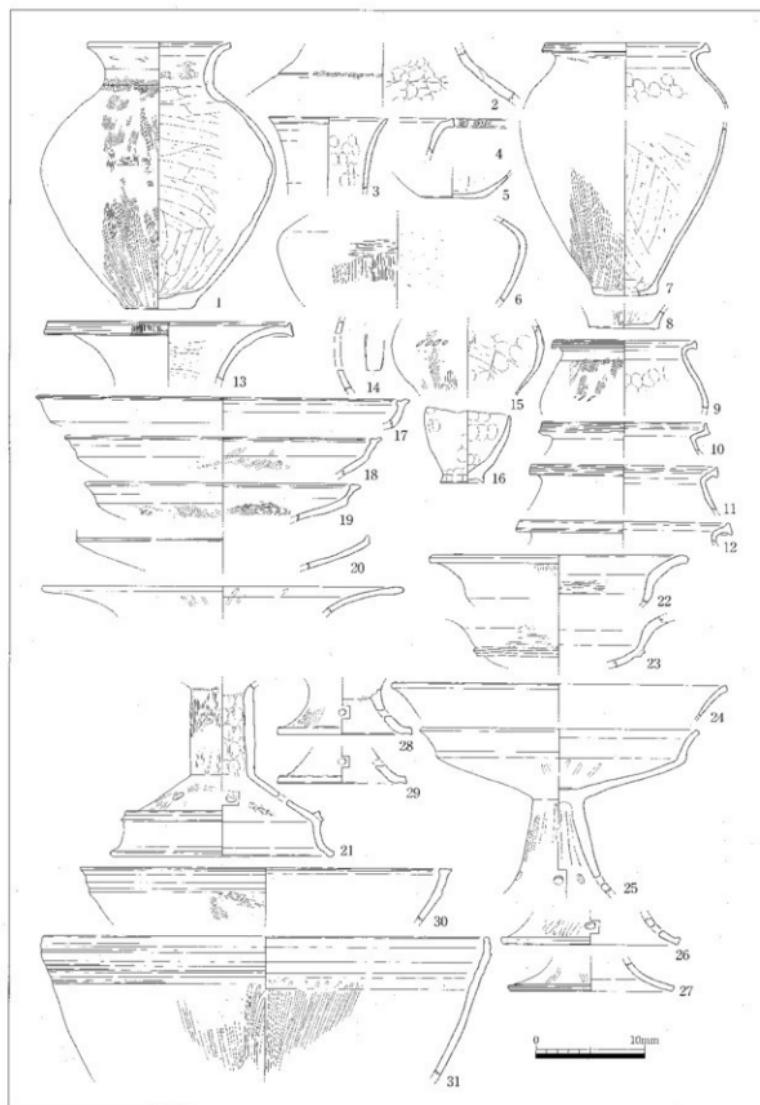
第96図 遺跡の位置〔高松南部〕



第97図 大溝1 断面



第98図 土坑1 検出状況



第99図 出土遺物実測図

## 雨山南古墳群～3・13号墳～

1. 所在地 高松市三谷町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成17年6月6日  
～平成17年6月10日
4. 調査面積 約80m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 川畠 憲
6. 調査の原因 電気通信用無線基地局建設
7. 調査結果の概要

雨山南古墳群は、雨山の南斜面に小規模墳が密集している古墳時代後期末の群集墳である。そのうち3号墳を調査対象としたが、調査中において工事範囲内に13号墳が新たに確認されたため、13号墳も調査することになった。

3号墳は、直径約11mの円墳で、低い墳丘をもつ。墳丘は、地山削り出しで成形されており、背面から側面にかけて周溝がめぐっている。墳丘中央に、南向きの墓壙が掘削されている。石室石材はほとんど抜き取られているが、小型の横穴式石室または小石室を主体部にしていたと考えられる。墓壙前面や周溝から出土した須恵器より、7世紀第3四半期の築造年代が推測される。13号墳は、一辺約9mの丸みを帯びた方墳の可能性があり、低い墳丘をもつ。墳丘は、地山削り出しで成形されており、背面には周溝がめぐっている。墳丘の大部分が失われ、墓壙や出土遺物もないが、3号墳と同じ頃のものと考えられる。

## 8.まとめ

雨山南古墳群は、13基以上の古墳から構成される。1・4号墳は、墳丘直径が14~19mと比較的大きく、小型の横穴式石室が露出している。また、1号墳周辺では7世紀第2四半期の須恵器が表探されている。以上のことから、雨山南古墳群は、7世紀第2四半期~第3四半期にかけて形成された群集墳であると想定される。また、東側に隣接する北山古墳群も同様な内容であることから、雨山南古墳群の一支群の可能性がある。(川畠)



第100図 遺跡の位置〔高松南部〕



第101図 3号墳全景（北西から）



第102図 13号墳全景（東から）

# たひまつばやし 多肥松林遺跡

1. 所在地 高松市多肥上町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成17年11月16日～28日
4. 調査面積 320m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 大鷗和則
6. 調査の原因 店舗建設
7. 調査結果の概要

調査地は、多肥松林遺跡（高松土木・県道）と松林遺跡（通学路・宅地造成）に囲まれている。試掘調査において22箇所のトレンチ調査を実施したところ、調査対象地の中央部に旧河道を検出した。この旧河道は、多肥松林遺跡（県道）から、今回の調査地を通り、松林遺跡（通学路）、さらに多肥松林遺跡（高校）へ流れる流路であることが予想される。なお、旧河道中からは遺物が出土しておらず、発掘調査の対象外とし、旧河道の西岸約90mをI区、東岸230mをII区として調査を実施した。

今回の調査では概ね7世紀～11世紀と近世の遺構・遺物を検出している。7世紀～11世紀ではI・II区とも溝を多数検出した。I区の溝が多数掘削されている状況は、隣接する松林遺跡（宅地造成）と同様である。一方、II区では旧河道からSD3を引き込んでおり、さらにそこからSD4・5等の溝が派生しており、旧河道からの取水または排水施設としての利用が考えられる。近世では、II区において掘立柱建物跡を2棟検出しており、居住域であったと考えられる。

## 8.まとめ

旧河道の西側微高地上には松林遺跡（宅地造成）が所在し、その集落域の東限が今回の調査地のI区にあたると考えられる。同様に東側微高地上には、多肥松林遺跡（高松土木）が所在し、こちらもその西限がII区にあたると考えられる。なお、周辺の調査では弥生時代中期の遺構・遺物が中心であったが、今回の調査では遺物が混入する程度であった。（大鷗）



第103図 遺跡の位置〔高松南部〕



第104図 I区完掘状況（南から）



第105図 II区完掘状況（北東から）

## 多肥宮尻遺跡

1. 所在地 高松市多肥上町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成17年11月21日～25日
4. 調査面積 120m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 店舗建設
7. 調査結果の概要

調査地は、多肥宮尻遺跡（県道）と日暮・松林遺跡（都市計画道路）に隣接する。発掘調査では、主に弥生時代と近世以降の2時期の遺構・遺物を検出した。

このうち、弥生時代では、掘立柱建物跡1棟、溝1条、ピット多数を検出した。掘立柱建物跡は1間（2.1m）四方である。隣接する日暮・松林遺跡において、弥生時代中期の掘立柱建物跡については規則的に主軸方位を東西方向とすることが指摘されており、今回の調査で検出した掘立柱建物跡も同時期の可能性が高い。溝は、南北方向に流れるもので、検出長11m、幅90cm、深さ53cmを測る。埋土から弥生時代前期末の遺物が出土しているが、周辺の発掘調査では当該期の遺構・遺物は希薄であり、溝の埋没が前期末とは断定はできない。

一方、近世以降の遺構については、その性格が不明なものが多いが、粘土探掘坑と考えられるSK1を検出した。調査地の東西両端は耕作土直下で疊層となっているが、中央部の明黄褐色シルト～粘土層が存在する部分で、周辺部同様、粘土探掘を行っていることがうかがえた。

### 8. まとめ

これまでの周辺での発掘調査において、調査地周辺に古墳時代の遺物が集中することから、当該地は古墳時代の集落域を想定していたが、当該期の遺構は検出されなかった。しかしながら、表探資料には須恵器や土師器、瓦器、輸入青磁等の遺物が出土しており、調査区周辺が古墳時代や中世においても土地利用がなされていたことは否定できない。（大島）



第106図 遺跡の位置（「高松南部」）



第107図 完掘状況全景（西から）



第108図 掘立柱建物跡完掘状況（西から）

たかまつじょうあと ことぶきちょう  
高松城跡（寿町地区）

1. 所在地 高松市寿町二丁目
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成18年1月12日  
～平成18年3月28日
4. 調査面積 約550m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 小川賢・中西克也・末光甲正
6. 調査の原因 事務所ビル建設
7. 調査結果の概要

調査地は旧高松城内の南西部に位置し、現存する絵地図及び周辺部で行われた調査結果との照合により、東西方向の通筋に面した武家屋敷跡の一角に比定される。

調査の結果、この武家屋敷跡に関わる遺構と考えられる建物跡、井戸、溝、廐棄土坑、性格不明の大型遺構等を確認した。また調査地の中央を南北に走る溝や大型遺構を境に、建物等の配置状況が東半部と西半部で異なって見られ、東西に2軒の屋敷地が隣接していた状況が窺われる。

一方、所属時期が中世つまり高松城築城以前に該当する可能性があるものに、区画溝や石組み井戸、柱穴等が、遺存状況は良好ではないものの、一定の密度で認められた。

#### 8.まとめ

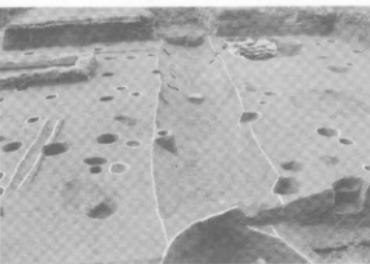
近世（高松城跡）に関するものでは、確認された遺構・遺物によって、敷地の拝領者等を知ることはできなかった。ただし、調査成果は、近世全般にわたって通筋に面していた武家屋敷の家格を反映しており、これまで比定されていた絵地図との対応とほぼ一致している。また中世に属するものでは、大半が中世末～近世初頭の埋没時期と推定され、近隣に位置する無量寿院跡と同様に、高松城の築城や整備にあたって姿を消した集落跡と考えられる。（小川）



第109図 遺跡の位置（「高松北部」）



第110図 性格不明の大型遺構（南から）



第111図 中世の区画溝（南から）

し せき かまつじょうあと くろがねもん  
**史跡高松城跡（鉄門）**

1. 所在地 高松市玉藻町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成17年8月17日～19日
4. 調査面積 9m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 史跡整備
7. 調査結果の概要

調査地は、高松城跡の二ノ丸と三ノ丸の間に位置する。鉄門の北側石垣のき損に伴い、平成16年度には石垣上面及び東西両辺部の発掘調査、石垣解体に伴う立会調査を実施した。平成17年度では解体部分の根石部分の状況確認のため、石垣の南東隅角部及び南西隅角部の裾部について発掘調査を実施した。

南東隅角部の調査では、現状で見える最下段の石よりさらに2石の石積みがあることを確認した。地上部の隅角石にはすべて矢穴が見られるのに対し、埋没している石材は花崗岩の野面石であった。また、根石下部には胴木等は存在せず、根石の前面に径10～20cmの礫を置いていた状況がうかがえた。南西隅角部の調査では、現状でわずかに見える最下段の石材が根石であり、根石のみが野面石である。根石前面は、近現代の搅乱が著しく不明であるが、根石下部に径10～20cmの礫を配置している状況がうかがえた。

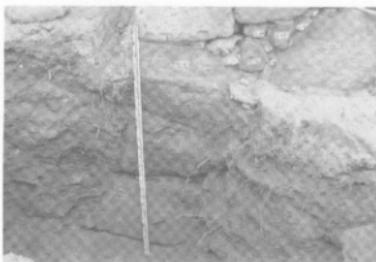
#### 8.まとめ

これまでの高松城跡内の発掘調査と同様に、根石下部に胴木等は存在しなかったが、礫を配置することで、根固めを意識していることがうかがえた。地上部の隅角石には矢穴が認められるのに対し、地下の石材は野面石であることから、地上部分の石垣の積み直しが想定される。

なお、平成17年度において石垣修理を実施した。(大嶋)



第112図 遺跡の位置〔高松北部〕



第113図 南東隅角部完掘状況（東から）



第114図 石垣修理状況（北東から）

## し せき てん ねん き ねん ぶつ や しま や しまのきあと 史跡天然記念物屋島（屋嶋城跡）

1. 所 在 地 高松市屋島東町
2. 調 査 主 体 高松市教育委員会
3. 調 査 期 間 平成17年11月1日  
～平成18年3月28日
4. 調 査 面 積 約100m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 山元敏裕
6. 調査の原因 史跡天然記念物屋島に所在する遺跡の把握
7. 調査結果の概要

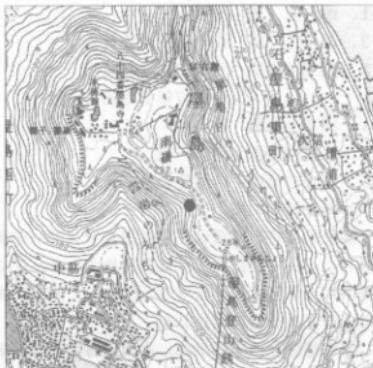
屋嶋城跡の城門構造は、平成13年度調査の確認以降、平成15年度調査では、城門前面が懸門構造であることや城門内通路を北側へ屈曲させるなど城内への侵入に備えて厳重な防御構造であるなど構造解明が進んでいる。平成17年度調査については、これまでの成果を受け、城門両側壁背部の内部構造と、城門南側の外郭線石積みが途中で途切れる部分における内部構造の解明を目的として、それぞれ実施した。

調査の結果、城門両側壁の背部では、側壁石積み天端より1mの平坦な控えをおいて、高さ50cmの石積みの存在が認められた。使用している石材の規模には大小があるものの、概ね3段程度は積上げている。現状におけるこの石積みの目的は、背面に存在する土塁積土の城門への崩落防止のための土留め的な構造物であると考えられる。

城門南部の外郭線石積みが途切れている部分については、埋没している高さ3mの石積みと、その上部において層厚約5cm程度の間隔で堅く積み上げられた土塁を確認した。さらに、背面では平成15年度に確認した石積みの延長部分の石積みが、旧地形の関係から列石へと変化し、15年度トレッチの端から4m南で列石が途絶えている状況を確認した。

### 8.まとめ

平成17年度では城門構造の詳細や時期の特定できる遺物の出土など多くの成果をあげることができた。これらの成果をもとに平成18年度の調査では更なる構造解明に努めたい。（山元）



第115図 遺跡の位置〔高松北部〕



第116図 南側壁背部遺構検出状況（東から）



第117図 土塁背部石積み検出状況（北から）

み たに なか はら  
三谷中原遺跡

1. 所在地 高松市三谷町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成17年3月24日  
平成17年7月16日～22日
4. 調査面積 約80m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 川畑聰
6. 調査の原因 店舗建設
7. 調査結果の概要

調査地は香川県埋蔵文化財調査センターが調査した三谷中原遺跡の東側隣接地であり、深く掘削が及ぶ浄化槽と擁壁部分について試掘調査および立会調査を実施した。

浄化槽部分については、水田の耕作土層と床土が約30～50cm堆積しており、その直下で造構面を確認した。確認した造構は出土遺物から平安時代頃と推測されるが断定はできない。このうちSD01と呼称した溝は、県調査分のSD07の延長上にあたることから同一の溝と推測され、SD01は古代の官道である南海道の南側側溝に相当すると考えられる。なお、一部において造構面から約1m深掘りしたが、旧河道（県調査分SR02）と考えられる堆積層が認められただけで遺物は確認されなかった。

西側擁壁部分では、県調査分の弥生時代の旧河道SR02と推定南海道南側側溝SD07の続きを確認した。東側擁壁部分でも、推定南海道南側側溝と考えられる溝を含めて計3条の溝を確認した。これにより、南海道の南側側溝が約60mにわたって続いている可能性が出てきた。南側側溝の時期については、出土遺物はないが、県調査の成果等から平安時代と推測される。

#### 8.まとめ

今回の調査により、南海道の南側側溝を確認したことが大きな成果であった。北側側溝については不明瞭であったが、南の方が高い地形を考慮すると、北側側溝は浅く後世に削平されたか、当初から側溝を設けなかった可能性がある。（川畑）



第118図 遺跡の位置〔高松南部〕



第119図 浄化槽部分 SD01（西から）



第120図 東側用壁部分（北西から）

# 舟岡古墳

1. 所在地 高松市香川町浅野
2. 調査主体 香川町教育委員会
3. 調査期間 平成17年9月1日～2日
4. 調査面積 10m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 中原裕二・川畑聰
6. 調査の原因 個人住宅改築
7. 調査結果の概要

調査の対象は、墳丘南側に取り付く南北9m×東西3m×高さ1m未満の盛土であり、工事により盛土を除去する必要が生じたため、試掘調査を実施することになった。

盛土の東側に、南北方向のトレンチを設定した。トレンチ北端から約1m30cmまでは墳丘を示す版築が認められたが、他は江戸時代以降の瓦・陶磁器を含む盛土であった。また、周構や遺物も確認できなかった。なお、地山である淡黄色シルト質極細砂の下も掘削した結果、黒褐色の砂礫層を確認している。

一方、トレンチ調査とは別に、古墳の内容を把握するため、墳丘東側斜面に露出していた石積を調査した。その結果、川原石積みの横穴式石室を確認した。石室幅は約1m50cmを測り、残存状況は良くないが、墳丘奥まで続いているようである。石室は、調査後に土のう袋で埋め戻して養生した。

## 8.まとめ

今まで詳細が不明であった舟岡古墳が、古墳時代後期の横穴式石室墳であることが判明したことは意義深い。従来、舟岡古墳は浅野小学校に保管されている剖抜式舟形石棺が出土した古墳の一候補に挙げられていたが、今回の調査によって可能性がなくなったわけである。ただし、舟岡古墳の墳丘からは、横穴式石室と年代が合わない円筒埴輪の破片が採集されており、付近に前期～中期にかけての別の古墳が存在した可能性もある。(川畑)



第121図 遺跡の位置(「高松南部」)



第122図 墳丘・トレンチ全景(南から)



第123図 石室検出状況(東から)

# じん 神 内 城 跡

1. 所 在 地 高松市木太町
2. 調査主 体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成17年9月20日～23日
4. 調査面積 約91m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 川畠 聰
6. 調査の原因 店舗建設
7. 調査結果の概要

神内城は、天文・天正年間に植田から移住した神内景之・清定父子が居城としたことで知られている。平成12年度の第1次調査では、城の北限を示す溝を確認するとともに15～16世紀の遺物が出土している。今回の第2次調査は、城の南側にある。

調査の結果、溝1条、土坑11基、柱穴70基を確認した。これら遺構や遺物は、おおむね

4時期に分けられる。まず古代では、柱穴の一部が該当し、掘立柱建物跡を構成する可能性がある。出土遺物からは7世紀または9世紀の可能性がある。次いで中世前半では、柱穴の一部が該当し、土師質土器2点を埋納しているものもあった。神内城が営まれた中世後半では、柱穴の一部が該当する可能性があるが、遺物は希薄である。城内北側にあたる第1次調査では遺構・遺物とも密度が高かったことを考慮すると、城内の北側に居住域を配置していた可能性がある。廃城後の近世では、溝および土坑群が該当し、出土遺物から17世紀の年代観が与えられる。溝に沿って土坑が連なっていることが特徴で、用途は特定できないが、農耕を目的として掘削された可能性がある。

## 8.まとめ

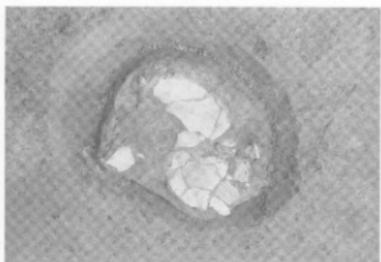
第1次調査の結果と合わせて、神内城跡の空間的様相が判明しつつある。また、周辺で実施された発掘調査の成果も含めて、木太地域の歴史が次第に明らかになりつつあるといえる。今後も神内城跡および周辺部での調査成果が期待される。(川畠)



第124図 遺跡の位置〔高松北部〕



第125図 調査区全景（東から）



第126図 土器出土状況（南から）

# 特別史跡讃岐国分寺跡

1. 所在地 高松市国分寺町国分
2. 調査主体 国分寺町教育委員会
3. 調査期間 平成17年7月5日～22日
4. 調査面積 110m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 渡邊 誠
6. 調査の原因 個人住宅建築
7. 調査結果の概要

調査対象地は、特別史跡讃岐国分寺跡の西部中央に位置し、これまでの調査成果によれば明確な遺構は確認されていない寺域外となっている場所である。調査対象地において十字形に試掘調査を行った結果、掘立柱建物跡と想定される柱穴群が確認されたため、トレンチを拡張して調査を実施した。その結果、検出された遺構は、古代の掘立柱建物跡、中世段階（14～15世紀）の柱穴群および溝であった。この調査により、寺域の西側で初めて讃岐国分寺跡に関連する遺構が検出された。

確認された掘立柱建物跡SB01は、一辺が約0.8～1.1mの柱穴によって構成され、各柱穴は、約2.6mの間隔で並ぶ。建物規模は調査区内で、南北7間、東西2間となり、さらに西方向に調査区外へと延びていることが想定できる。土層や柱穴規模などから、柱穴の上部は大幅に削平されているようである。掘削を行った一部の柱穴では、瓦による柱の根固めの状況が確認された。

## 8. まとめ

今回の調査において、初めて寺域の西側で讃岐国分寺に関連すると考えられる遺構が確認された。今後、同様な讃岐国分寺跡を取り巻く周辺の土地利用の状況を示す事例の増加が期待される。なお、本調査地は、土地所有者の協力によって、宅地化するにあたって遺構の保護措置を図ることになった。（渡邊）



第127図 遺跡の位置(「白峰寺跡」)



第128図 調査区全景(東から)



第129図 柱痕検出状況(東から)

# の くら 野 倉 4 号 墳

1. 所 在 地 木田郡三木町鹿庭

2. 調査主体 香川県教育委員会

3. 調査期間 平成17年11月1日

～11月11日

4. 調査担当 香川県教育委員会

信里芳紀

5. 調査面積 約120m<sup>2</sup>

6. 調査原因 農道建設

7. 調査結果の概要

野倉2号墳に隣接する丘陵斜面において、県営農道建設工事中に横穴式石室が発見された為、発掘調査を実施し保護措置を行うこととなった。

全長3.7mを測る右片袖の横穴式石室を内  
部主体にもつ、直径7.3～9.5m程の円墳である。

天井石は既に失われていたが、玄室壁材は良好に遺存しており、玄室床面積は約2.24m<sup>2</sup>を測る。県下の横穴式石室に見られる床面積との比較では、小型の部類に属する。

築造（初葬）時期は、TK209型式併行期と考えられ、床面の更新とともに同型式の時間幅の中で追葬が行われる。また、少数ながら、TK46～TK48型式と見られる須恵器片が確認できることから、時間を空けてTK46～48型式に追葬あるいは終葬が行われたと考えられる。副葬品組成を点検すると、須恵器蓋杯に加えて鉄鎌、刀子といった極めて単純な組成を示す。

墳丘・石室・副葬品組成の状況から、低位階層の小規模墳と捉えるのが妥当であろう。

## 8. まとめ

本墳が位置する三木町南部には、西土居古墳群やカンカン山古墳群、蛇ノ角古墳群のように多くの群集墳が存在しており、造墓集團同士の関係や、群集墳内部での造墓主体の変遷など、今後検討が必要な事項が多い。詳細は、調査報告書を参照していただきたい。（信里）



第130図 遺跡の位置（「鹿庭」）



第131図 墳丘の全景



第132図 横穴式石室 全景

## かんかん山古墳群

1. 所在地 木田郡三木町大字上高岡字諏訪
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成17年10月14日  
～10月24日
4. 調査担当 三木町教育委員会  
石井健一
5. 調査面積 約45.5m<sup>2</sup>
6. 調査原因 NTTドコモ無線中継局建設
7. 調査結果の概要

大師山（かんかん山）から北方に延びる尾根筋上の諏訪神社周辺にはかんかん山古墳群（13基）が所在している。事業予定地は、同3号墳を含む丘陵であったため、その正確な位置及び包蔵状況を確認することとなった。

調査の結果、尾根平坦部から北斜面にかけての広範囲に烟としての土地利用に伴う地形改変が確認された。尾根筋上に設定した1トレンチでは、浅い造成土が堆積しており、尾根最高位ではコンクリートの基礎が存在するなど攪乱を受けた箇所も見受けられた。1トレンチと直交方向に設定した2トレンチ西隅からは、造成土の下層に須恵器片の包蔵が確認された。また、北斜面部からは、開墾時に投棄されたと思われる須恵器片（壺、杯）が多く表面採集されたため、3トレンチを設定したが、弥生土器片を含む造成土の堆積を確認しただけで、遺構・遺物は皆無であった。

### 8.まとめ

3号墳の主体部が存在すると考えられていた尾根平坦部には、後世の烟としての土地利用に伴う削平が認められ、現状での遺構の存在は確認できなかった。しかしながら、須恵器包含層や表面採集した須恵器などから、調査地周辺に3号墳が所在していた可能性は高い。表面採集した須恵器は、5世紀末墳を中心とする時期のものと考えられる。

なお、その後実施した分布調査で諏訪神社西側の丘陵一帯にも新たに9基の古墳が存在することが明らかになった。同丘陵の南東部分に広がる西土居古墳群（20基）などとともに、大師山周辺において40基以上からなる大規模な群集墳を形成していたことが明らかになった。（石井）



第133図 遺跡の位置(「鹿庭」)



第134図 1トレンチ完掘状況



第135図 カンカン山2号墳

# しらやま白山山4遺跡

1. 所在地 木田郡三木町大字下高岡字白山
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成17年4月23日  
～6月13日
4. 調査担当 三木町教育委員会  
石井健一
5. 調査面積 約70m<sup>2</sup>
6. 調査原因 白山景観整備事業
7. 調査結果の概要

平成16年度の試掘調査により白山の西斜面部の中位から下位にかけて確認された白山4,5,6遺跡の内、工事の影響をうける白山4遺跡について本発掘調査を実施した。

調査の結果、方形周溝墓3基を確認したが、試掘調査以前に施工された作業道によつて大半が失われていた。

調査区の北側で検出された1号墓に伴う周溝の残存部は、幅1m、深さ0.3mを測り、墳丘裾の列石と、墳丘から転落した塊石を検出した。また、作業道を挟んだトレーナーで周溝の延長が確認されたことから、平面形は方形と考えられる。主体部検出できなかった。

1号墓周溝の南西部に接する形で2号墓を検出した。周溝幅は、0.4から0.7mを測り、平面形がL字形に屈曲する。墳丘裾部には、列石が残存しており拵大程の塊石が整然と配置されていた。列石は、一旦周溝を掘り込んだ後、裏込と考えられる盛土を行なが施されていた。主体部は、周溝に接する形で検出した土壤1基と、壺棺1基を検出した。位置関係から見て、墳丘中央部に別の主体部の存在していた可能性が高い。周溝内から弥生土器片が出土している。

2号墳の南側に接した形で3号墓の周溝を確認した。周溝内からは、塊石が検出されたが、墳丘は完全に削平されていた。

## 8.まとめ

調査地上方の作業道の壁面においても周溝と思われる遺構を確認しており、斜面部の高位の広範囲が墓域として利用されていた可能性が高い。

銅鐸出土地である白山1遺跡、山頂の同2遺跡、広範囲に集落域が確認された同3,5,6遺跡に加えて、同4遺跡で方形周溝墓が確認されたことは、高地性集落である白山遺跡群全体の構造と意義を考える上で極めて重要である。(石井)



第136図 遺跡の位置〔志度〕



第137図 調査地全景（左から1,2,3号墓）



第138図 2号墓検出状況

# いし だ こう こう こう てい ない 石田高校校庭内遺跡

1. 所在地 さぬき市寒川町石田東  
2. 調査主体 香川県教育委員会  
3. 調査期間 平成17年9月1日  
～11月30日  
4. 調査面積 291m<sup>2</sup>  
5. 調査担当者 香川県埋蔵文化財センター  
森下英治・佐々木和裕  
宮武直人  
6. 調査原因 県立石田高校造園実習棟新築  
7. 調査結果の概要

石田高校校庭内遺跡は、銅鐸・銅劍・巴形銅器などが出土した「森広遺跡群」の一画にあたる。今回、新たに弥生時代後期から終末期の堅穴住居跡4棟や同後期前半の溝跡1条が見つかった。堅穴住居跡は、円形2棟、隅丸形2棟があり、床面ではベッド状遺構、炬跡、4主柱穴などを検出した。

このうち円形住居床面より鉄鎌1点、方形住居埋土中より板状鉄片1点が出土した。溝跡は幅1.5~4m、深さ1.5mの規模で南から北に流れる。最深部には井戸状の穴が5基あり、湧水を灌漑に利用している。うち1基より、重量261gの大形管状土錘が1点出土した。また、溝の埋没途上で量多の弥生土器が投棄されている。その中には、土器焼成時に破損した資料も多く含まれ。調査地周辺で盛んに土器焼成が行われたことを示す。住居跡や溝跡から出土した打製石、庖丁の石材は、後期前半期はサスカイト、後期後半以後は結晶片岩である。また、弥生時代以後の基盤層である黄色系砂質土層より、绳文時代後期の土器や石器（剥片含む）約200点が出土した。このほか、奈良時代の灌漑用井戸跡1基も検出した。これらの調査成果は、10月29日に開催した現地説明会において一般公開した。

## 8. まとめ

森広遺跡群では今回の調査区を北限として東西約400m、南北約800mの範囲に竪穴住居跡等が多数見つかっている。今回の各遺構もその時期に合致することから、当遺跡群は多彩な青銅器を保有する弥生時代後期・終末期の大形化した集落と考えられる。梅釐川・地蔵川を介して、津田・志度両方へのアクセスが容易な立地環境は、東讃地域における対外交渉の拠点として良好な条件である。(森下)



第139図 遺跡の位置(「志度」)



第140図 調査地全量（北から）



第141図 溝底の出土の大形管状土鉢

## 鶴の部山古墳

1. 所在地 さぬき市津田町鶴羽  
1483-1
2. 調査主体 さぬき市教育委員会
3. 調査期間 平成17年10月12日  
～11月15日
4. 調査面積 約76.5m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 大川広域行政組合  
松田朝由
6. 調査の原因 確認調査
7. 調査結果の概要

鶴部山の南側尾根上に位置する積石塚の前方後円墳である。昨年度の後円部東側に引き続き今年度は西側を調査した。また、後円部頂の表土を剥ぎ、積石の表面観察を行った。

調査の結果、昨年度確認されていた後円部を取巻く外周段築が西側においても確認できた。外周段築は各トレンチで標高約9mの地山テラス上に上位に小礫、下位に大ぶりの礫を石積みしている。また、トレンチ8からは後円部を積み上げた後に外周段築の石積みが行われたことが判明した。

後円部頂は祠の基壇と考えられる石列を確認した。また、祠の下には白色凝灰岩が認められ、現在の農鳥石の祠以前に五輪塔等の石造物が造立されていた可能性が想定された。

遺物は後円部頂、トレンチ7、トレンチ9において広口壺片が出土、古墳祭祀に伴う土器と考えられ、古墳築造の時期が古墳時代前期初頭と判明した。

### 8.まとめ

今回、広口壺片が出土したことから古墳築造の時期がようやく判明した。土器の胎土には雲母、角閃石が含まれているが、これは同じさぬき市内に所在する丸井古墳や稲荷山古墳におおよそ共通し、形態も共通点が多い。昨年度の調査では古墳の在地的特徴が明らかとなつたが、供獻土器からも在地性が指摘され、津田湾古墳群における鶴の部山古墳の位置づけがより鮮明になったといえる。(松田)



第142図 遺跡の位置(「讃岐津田」)



第143図 トレンチ6 外周段築



第144図 後円部頂

# ひとつ山古墳

1. 所在地 さぬき市津田町鶴羽
2. 調査主体 さぬき市教育委員会
3. 調査期間 平成17年11月1日  
～平成18年3月21日
4. 調査面積 約720m<sup>2</sup>（測量範囲）
5. 調査担当者 大川広城行政組合  
阿河聰二
6. 調査の原因 遺跡内容確認
7. 調査結果の概要

一つ山古墳は津田湾南端にある鶴部岬の一隅をしめる丘陵上に所在し、独立状丘陵を呈した陸繫島である。島は瓢箪のように南北に細長くそれぞれ小頂部をもち、古墳はこの南側小頂部に築かれている。標高は約32mで西側低地との比高は30mを測り、東岸は海に面し波蝕のため切り立った急崖となっている。これまでの一つ山古墳についての知見はごくごく限られたもので、明治年間に発掘され箱式石棺からは銛刀や人骨・朱などが出土し、棺材が飛び出されたということが伝えられている。その後の踏査記録でも小規模な円墳（直径10～20m）で、小碟を用いた葺石の存在が指摘なされているにすぎない。今回は台風などのによる崖面崩落が古墳北東側に見られることから実施したもので、調査は丘陵頂部周囲の伐採後に平板による地形測量を行い、3カ所にトレーニチを設定したものである。測量結果によると擾乱や木株の凹凸は見られるも等高線は比較的円弧を描いており、標高29m前後に緩やかではあるが傾斜変化を認めることができた。また墳丘北側斜面トレーニチでは標高約29.5mと約28mの2カ所において、葺石らしき拳大の円碟の集中帶を検出し、上段については砂利（小礫）を敷設している。下段については転落石の可能性があるも、この下端が基盤土を整形した墳裾といえるものでこれからすると墳丘は直径約25～30mを測る。やや長椅円形を呈する二段築成の円墳ともわれる。墳頂部トレーニチではその北側にかけての傾斜部分にて墳丘盛土を確認するとともに、墳頂部にて板状安山岩片多数と白色凝灰岩製削抜式石棺の一部を検出している。墳頂部は現石造物や先の盗掘伝を含め複数回の掘削を受けているようで、検出状況は如実にこれを反映したものとおもわれる。なお古墳の時期は出土した壺形埴輪から古墳時代前期後半に位置づけられる。（阿河）



第145図 遺跡の位置(「讃岐津田」)



第146図 墳丘西側の状況



第147図 葺石検出状況

## おお くし いし きり ば 場 跡 大串石切場跡

1. 所在地 さぬき市小田松ヶ谷2671-92
2. 調査主体 さぬき市教育委員会
3. 調査期間 平成18年1月30日～2月12日
4. 調査面積 約6000m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 大川広域行政組合 松田朝由
6. 調査の原因 確認調査
7. 調査結果の概要

大串半島先端の「白粉谷」にある。石清水八幡宮文書「建武回祿之記」に鴨部莊から京都石清水八幡宮に石材を搬送した記載があり、その石材を採石していた石切場跡の候補地である。

昨年度の谷北半分の測量調査に引き続き今年度は南半分を実施、現状の全容がほぼ明らかとなつた。

採石方法は大きく2タイプ認められる。石切構Aは石壁から製品に近い形に採石したと考えられ、円形や方形のさまざまな採石痕がある。壁面には幅2～3cmの方形の工具痕が見られ、石壁はオーバーハンプしている。全体的にはアトランダムな採石が看取される。

石切構Bは長さ80～85cm、幅40～45cm、深さ25～30cmの切石を効率よく規則的に採石している。壁面には細長の工具痕がジグザグ状に方向を変えて壁一面に認められる。これら2タイプの石切構は目的とする製品の違いとともに時期差となる可能性がつよい。

遺物は伐採中13世紀前半の瓦器碗片を探集した。これまで遺跡内からは時期の判断できる遺物は確認されておらず、探集遺物ではあるが石切場操業時期を検討する重要な資料である。

### 8.まとめ

石清水八幡宮文書「建武回祿之記」には暦応2年(1339)、先例に任せて鴨部莊から石清水八幡宮に石材を搬送した、とあり、暦応2年以前にも石材を搬送していた可能性が指摘されていたが、13世紀前半である今回の瓦器碗の探集は文献の記載を裏付ける結果となった。大串石切場跡は中央と地方の関係という莊園制の一端を窺うことのできる重要な遺跡である。(松田)



第148図 遺跡の位置(「五剣山」)



第149図 第2-4地点



第150図 第2-5地点

かみからたち  
上辛立遺跡

1. 所在地 さぬき市長尾西
2. 調査主体 さぬき市教育委員会
3. 調査期間 平成17年8月5日  
～10月13日
4. 調査面積 約395m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 大川広域行政組合  
阿河銳二
6. 調査の原因 公共施設建設工事
7. 調査結果の概要

上辛立遺跡は旧長尾町の平野南西にあり、鴨部川東岸に広がる扇状地に立地する。近傍には辛立遺跡や辛立下遺跡など、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての集落遺跡が所在している。

今回の調査で確認された構造は、堅穴式石室及び箱式石棺墓・配石土坑墓・土器棺墓などから構成される墳墓群である。地山層である砂質土は微地形的に調査区南西隅が最も高く、周辺に向かって傾斜している。各埋葬施設は調査区西側において概ね南北方向に配置されていた。個々にみると、堅穴式石室は地形的に最も高い南西部に構築されており、川原石を数段積み上げたものである。平面形は、隅部が鈍角の長方形で、石室の規模は長さ約2.4m・幅約0.9mを測る。主軸は東西を探り、墓坑底の中央は長楕円形に窪ませている。これに平行して南側5mのところに一回り小さい石室墓が構築されており、長さ約2m・幅約0.6mを測る。箱式石棺墓や配石土坑墓は、やや距離をおいて調査区の北端にあり、長さ約2m・幅約0.3m及び長さ約1.1m・幅約0.3mを測る。主軸は東西からやや南に振っている。また、土器棺墓は5基検出されているほか、堅穴式石室と箱式石棺墓との間では途切れながらも僅かに弧状にめぐる溝が南北2条あり、溝中からは完形の土器が出土した。時期については埋葬施設から良好な遺物は出土していないが、弥生時代終末期頃の墳墓群と想定される。

#### 8.まとめ

これまでのところさぬき市内における当該期平野部の墓制は、円形周溝墓・土器棺墓が主をなすもので、今回のような丘陵部にみられる墳墓群の構成が低地部で形成されていたことは、墓制だけではなく地域社会の動向を探る上での重要な資料といえる。(阿河)



第151図 遺跡の位置(「鹿庭」)



第152図 堅穴式石室及び周囲の近景



第153図 調査区全景

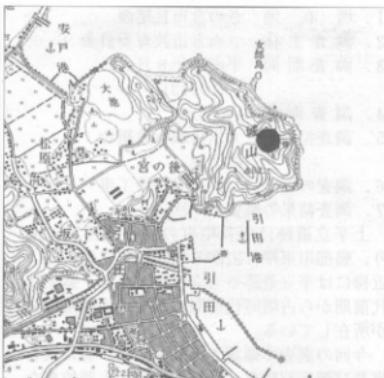
# ひけ 引 田 じょう 城 跡

1. 所 在 地 東かがわ市引田城山国有林
2. 調査主体 東かがわ市教育委員会
3. 調査期間 平成17年12月5日  
～平成18年2月23日
4. 調査面積 約1800m<sup>2</sup>（測量範囲）
5. 調査担当者 大川広域行政組合  
阿河銳二
6. 調査の原因 遺跡内容確認
7. 調査結果の概要

今年度は昨年度第Ⅰ調査区を設定した「馬つなぎ」曲輪の南半から城域内最高所を測る「東櫓」にかけて対象としたものである。調査は伐開した後、平板による20cmコンターで地形測量を行い、2カ所に試掘トレンチを設定した。東櫓では曲輪全体の現形を明確に把握でき、各辺が23~25mを測るやや不等な平行四辺形状の矩形で、さらにその西隅は入隅状にクランクを成す。東西各辺では石積や裏込めの一部が確認され、東隅や西隅では築石の並びが見られる。西隅の石垣は隅石などを欠いてはいるが、復元で高さ約2mになる。

また、北西辺は切岸状の傾斜となって馬つなぎと繋がり、水平距離において約10m、比高差は約3.6mを測る。遊歩道工事で築石が出ており、石積がなされていた可能性もある。他方馬つなぎ南半は南東に折れ平坦面を狭めながら延び、曲輪南辺には昨年同様に犬走りを介した二段築成の石垣が想定される。曲輪内は比較的の平坦といえるが、南辺に石垣に沿った低い筋状の高まりがみられる。次に試掘トレンチは、西隅クランクに設定したもので、馬つなぎに向かって緩傾斜をなす2Trでは中位から下方にかけて拳大ほどの礫が密集し、緩い段状を呈した状態で検出された。これらに明確な規則性や並びは看取されず乱雑といえるものである。石礫の出土位置はトレンチ下端では、現地表下50cm以上を測り、現表土と石礫の間には瓦片を多量に含んだ整地上が見られる。遺物では瓦片が多量に出土しており、17世紀前後の三葉文軒平瓦も僅かに含まれている。

前年度成果と合わせ二つの曲輪の様相を確認できたわけであるが、城郭全体の中での機能的な位置づけ等一層の検討を要する。(阿河)



第154図 遺跡の位置(「引田」)



第155図 切岸状傾斜面近景



第156図 1Tr 石垣検出状況

# 東かがわ市立史跡調査報告書 円仏寺北遺跡

1. 所在地 東かがわ市中山地内
2. 調査主体 東かがわ市教育委員会
3. 調査期間 平成18年2月27日  
～3月23日
4. 調査面積 約200m<sup>2</sup>
5. 調査担当者 大川広域行政組合  
松田朝由
6. 調査の原因 配水池築造工事
7. 調査結果の概要

遺跡は東かがわ市の西端、さぬき市との境付近にある。周辺には南側山塊頂部に城守山城跡、遺跡から谷地形を東に下り平野の広がりはじめめる地点に鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡や墓を検出した三殿出口遺跡がある。また、南海道の一説として三殿・円仏・田面コースがあり、遺跡付近に交通路が推測されている。現在遺跡の東側には地名として「障子」があり、「小路」と読み替えることができる。

調査区内において遺構面は南半が平坦地、北半が北に向かって緩やかに傾斜している。遺構は調査区北半の傾斜面にピット20、不明遺構1が見られるのに対して、南半の平坦地には削平のためか遺構は確認できなかった。調査区北東部では調査区壁面に砂と粘質土の互層がみられ、池の堤防と考えられる。盛土中から近世以降の陶器片が出土している。

ピットは径約20cm、深さ10～20cmである。埋土は灰褐色もしくは褐灰色をし、3基に柱痕を確認した。ピットから建物を復元することはすることはできなかった。遺物は小片であるが埋土から土師器片が出土し中世の遺構と考えられる。

不明遺構は径3mの不整円形である。壁面立ち上がりは階段状となり、中央部は径約1mの円形の高まりとして削り残されている。埋土は粘質土に明黄褐色土がブロック状に入り人為的に埋められたものである。埋土に混ざり10～30cmの塊石が10数点みられたが、規則的な配置は見られず、投げ込まれたものと判断できる。埋土中から近世以降の陶器片が出土した。(松田)



第157図 遺跡の位置(「引田」)



第158図 調査区全景



第159図 不明遺構

### III 平成17年度香川県埋蔵文化財センター発掘調査状況

#### 1 国事業に伴う発掘調査事業

平成17年度の国事業は、国道11号坂出丸亀バイパス道路改良工事に伴う発掘調査を普通寺市の2遺跡で実施した。普通寺市稻木町の稻木北遺跡と同市中村町の永井北遺跡の東西に隣り合う遺跡の調査である。いずれも現在供用されている国道11号（往復2車線）の拡幅工事に伴う調査で、幅15m程度の比較的狭長な調査区の設定となった。平成17年7月から18年3月までの期間で1班が調査に当たった。

稻木北遺跡の調査で、比較的大きな方形の掘り方を持つ古代の掘立柱建物跡群や横列跡を検出している。広範囲の発掘調査ではないために、充分な検討が求められるが、建物配置にある程度の計画性も考えられ、一般的な集落跡とも考えがたい。

永井北遺跡の調査で、弥生時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡と中世の遺構を検出している。

なお、両遺跡の南約350mにある稻木遺跡では、昭和58・59年度に四国横断自動車道建設工事に伴い発掘調査を実施し、弥生時代後期の集石墓や古代の建物跡群を検出しておらず、また永井遺跡は同工事に伴って昭和60・61年度に発掘調査を実施し、川底に打ち込まれた杭を伴い大量の縄文時代後晩期の土器を含んだ河川跡を検出している。

#### 平成17年度 国事業に伴う発掘調査事業一覧

遺跡名	調査面積	調査期間	遺構	遺物
稻木北遺跡	1,600m <sup>2</sup>	平17.7~平18.3	掘立柱建物跡群、横列跡、溝状遺構	土師器・須恵器
永井北遺跡	3,278m <sup>2</sup>		竪穴住居跡、掘立柱建物跡、横列跡、土墳墓、溝状遺構、土坑	弥生土器・石器、土師器・須恵器、白磁
	4,878m <sup>2</sup>			

#### 2 県事業に伴う発掘調査事業

県事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、県道・県管理国道関係では、県土木部が行う道路改良工事等に伴う発掘調査を多度津丸亀線、円座香南線、西植田高松線、高松普通寺線、国道438号関係の5事業7遺跡で実施した。

多度津丸亀線では仲多度郡多度津町庄で庄八尺遺跡の調査を実施し、中世の集落跡を検出している。室町時代と中世末の時期の遺構群を確認しているが、中世末に最盛期を迎える集落跡のようである。

円座香南線では、高松市西山崎町で本郷遺跡、同市中間町の川原遺跡の発掘調査を実施した。本郷遺跡の調査は、平成14年度から継続して行ってきたが、今年度が最終年である。サヌカイト製のスクレイバーや石鎌、収穫具などが出土している。旧石器時代や縄文時代の終わりごろと考えられる時期の遺物が出土しており、高松平野奥部の同時期の資料が増加した。また、弥生時代終わりごろの竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの建物遺構を確認している。川原遺跡の調査では、奈良時代の大規模な溝状遺構を確認している。この溝状遺構は調査区の東西幅約50mいっぱいにわたって、一直線に穿たれており、また周辺で復元できる条里型地割の方向に直交・平行するようである。古代南海道の位置を考えるのに重要な資料である。

西植田高松線では高松市川島本町で川島本町遺跡、同池田町で川島本町南遺跡の調査を実施した。川島本町遺跡の調査では縄文時代後・晩期の土器が出土している。高松平野東奥部での新しい事例である。川島本町南遺跡の調査は、小規模なものであるが、弥生時代から近世の遺構を検出している。

高松普通寺線では田村遺跡の調査を実施した。大型の掘り方をもつ柱穴跡を多数検出しており、奈良時代を中心とする時期の大型建物遺構が10棟ほど復元できそうである。田村遺跡は、奈良時代の瓦を出土して「田村廃寺」として考えられている古代寺院跡に近接して広がっており、両者の関係がうかがえる。なお、平成11年度に近接した場所で実施した調査では、平安時代後期を中心とした時期の梵鐘の鋳造遺構を確認している。

国道438号道路改築工事に伴う調査は、丸亀市飯山町で東坂元秋常遺跡の調査を実施した。「さぬき富士」の別名を持つ飯野山の東裾部で行った調査である。掘立柱建物跡を検出しており、室町時代前半ごろを中心とする時期の集落跡と考えられる。弥生土器、サヌカイト製石鎌が流れ込みの状態で出土しており、近接地に弥生時代の遺跡があるようだ。

県道・県管理国道以外の調査では、農改水産部農業經營課の香川県農業試験場移転整備事業に伴う西末則遺跡の発掘調査と県教育委員会高校教育課の県立石田高校造園実習棟新築工事に伴う石田高校校庭内遺跡の調査を実施した。

綾歌郡綾川町（旧綾南町北・綾上町山田下）に所在する西末則遺跡の調査は予備調査を含めると平成12年度からの継続事業であり、全体で約75,857m<sup>2</sup>の発掘調査を実施している。今年度の調査区では、掘立柱建物跡や自然河川跡を検出した。14世紀代を中心とした中世の集落跡の縁辺部の調査であったと考えられる。

石田高校校庭内遺跡は、銅鐸や巴形銅器などの弥生時代の青銅器を出土している「森広遺跡群」の一画にあたる遺跡で、当該地周辺では昭和40年代から発掘調査を実施している。今回の発掘調査で、弥生時代後期から終末期にかけての竪穴住居跡などを検出している。また、縄文時代後期の土器が出土している。小範囲、小規模の調査ではあるが、香川県東部の弥生時代の中心的な遺跡の調査であり、成果は大きい。

#### 平成17年度 県事業に伴う発掘調査事業一覧

遺跡名	調査面積	調査期間	遺構	遺物
本郷遺跡	3,857m <sup>2</sup>	17.4~17.8	竪穴住居跡、掘立柱建物跡 溝状遺構	スケレイバー・石器、 弥生土器、製塗土器
川原遺跡	2,700m <sup>2</sup>	17.12~18.3	溝状遺構	土器
川島本町遺跡	1,275m <sup>2</sup>	17.7~17.9	溝状遺構	縄文土器、弥生土器、 土器
川島本町南遺跡	448m <sup>2</sup>	17.10	溝状遺構	勾玉
東坂元秋常遺跡	2,896m <sup>2</sup>	17.11~18.3	掘立柱建物跡、溝状遺構	土器、須恵器、鉄滓、 銅鏡
庄八尺遺跡	5,598m <sup>2</sup>	17.4~17.10	掘立柱建物跡、溝状遺構 井戸跡	土器、白磁、青磁、 乗付、錢貨
田村遺跡	790m <sup>2</sup>	17.4~17.6	掘立柱建物跡群	土器、須恵器、瓦

遺跡名	調査面積	調査期間	遺構	遺物
石田高校校庭内遺跡	291m <sup>2</sup>	17.9~17.11	竪穴住居跡、溝状遺構	縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器
西末則遺跡	1,965m <sup>2</sup>	17.4~17.6	掘立柱建物跡、溝状遺構、自然河川跡	弥生土器、石器、土師器、須恵器、錢貨
計	19,820m <sup>2</sup>			

# 香川県埋蔵文化財調査年報

平成17年度

平成18年12月15日 発行

編集 香川県教育委員会事務局文化行政課

高松市天神前6-1

電話 (087) 831-1111

発行 香川県教育委員会

印刷 桑成光社